

生き物のにぎわいを支える豊かな農業

農業は、長年にわたって生態系との調和の中で営まれてきました。赤とんぼやメダカなど、私たちになじみ深い多くの生き物たちが生息する農業生態系も、農業活動により育まれています。農業は生物多様性から恩恵を受けると同時に、原生自然とは異なる特有の生態系を作り、生物多様性を維持してきたのです。しかし、そのことは一般にあまり知られていません。そこで、農業と生物多様性の関係を一般市民の皆様にも知っていただくために、11月5日(火)、東京(秋葉原)において公開セミナーを開催し、111名(一般市民16名、農業等5名、企業等24名、大学9名、研究機関24名、地方自治体21名、農水省ほか12名)の参加をいただきました。

セミナーでは、農業・農村と生物多様性の関係、環境保全型農業の効果を計る指標生物、景観構造や農地の集約化と鳥類の多様性に関する研究のほか、農業生産と生物多様性の両立事例や、一般の方々が生

物多様性をどのように考えているかについての紹介もありました。総合討論では、生物多様性の本質的な問題から生産現場に直結した問題まで、さまざまな観点の質問や意見が出されました。いただいた意見は今後の研究の展開に生かしていきたいと考えています。

(生物多様性研究領域長 安田 耕司)



名古屋大学教授 夏原 由博氏のスライドより

農業気象分野の国際研究ネットワーク・プロジェクトとその連携 第27回気象環境研究会

(独)農業環境技術研究所では、地球規模での気候変動に対する農業分野の対応を研究するため、さまざまな国際研究ネットワークやプロジェクトを主導・参画しています。これらの相互連携を促進するため、12月2日に、つくば国際会議場で標記の研究会を開催しました。当日は、及川武久筑波大学名誉教授とJoon Kimソウル大学教授による基調講演の後、農業気象とその関連分野の7名の研究者が、それぞれが主導・参画している国際研究ネットワーク・プロジェクトの目的や活動内容を紹介し、今後の連携について話し合いました。30年の歴史がある気象環境研究会で、英語による開催は今回が初めてでしたが、翌日から開催されたAgMIP関連の会合への参加者によるポスター発表

もあり、約50名の専門家が今後の連携に向けて相互理解を深めることができました。

(大気環境研究領域長 宮田 明)

農環研が主導・参画する農業気象とその関連分野の国際連携

